

2015.06.11.Friday

日本皮膚悪性腫瘍学会会報

理事長挨拶【土田哲也(埼玉医大皮膚科)】

今年度も日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会(7月3-4日、大阪)が近づいています。岡本会長はじめ主催校である関西医科大学皮膚科の皆様には大変なご苦勞をおかけしていますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

今度の学術大会時に、任意団体であった日本皮膚悪性腫瘍学会は社団法人に生まれ変わります。昨年度、すでに社団法人日本皮膚悪性腫瘍学会は設立されていますが、今回、移行が完全に終了いたします。煩雑な面もありますが、学会の社会的存在を考えると社団法人化は必然であると言わざるを得ません。

社団法人化に伴い、定款が定められ、会則の変更も行われます。これらを含めて、学会に関する情報はホームページ等で会員の皆様にはしっかりとお伝えしたいと思います。学会誌であるSkin Cancerが完全オンライン化されましたが、それに伴い、会員の皆様との連絡役を

担う新たな紙媒体として、このレターを始めることにいたしました。また、年会費の口座振替も実施しておりますが、手続き開始時には、当方の手順に不備があったため、ご迷惑をおかけし申し訳ありませんでした。深くお詫び申し上げます。

学会活動としては、学会賞である石原・池田賞も認知されるようになり、毎年皮膚悪性腫瘍に関する優れた論文を表彰できるようになりました。また、岩月先生を委員長とする皮膚がん予後統計委員会では、皮膚悪性腫瘍に関する調査を地道に続け、貴重なデータを蓄積してきております。今年度からは、さらに、長年の懸案であった皮膚付属器悪性腫瘍に関する調査・解析を渡辺先生・安齋先生を中心にワーキンググループで実施していく予定になっています。今後の大きな課題としては、皮膚悪性腫瘍診療ガイドラインの作成・改訂の問題があります。

このガイドラインは、日本がん治療学会、日本皮膚科学会、皮膚悪性腫瘍学会が共同して作成・改訂してきたガイドラインで、皮膚悪性腫瘍学会がその作業の中心を担ってまいりました。しかし、現在の体制では、昨今の皮膚悪性腫瘍診療をめぐる環境の変化のスピードには改訂がついていけなくなっており、早急な改善が必要になってきています。

以上、様々な問題を抱えています。益々高まってきている皮膚悪性腫瘍における診療、研究に対する社会の要請に応えるためにも、学会をあげて課題に取り組んでまいりたいと思っております。是非皆様のご協力をお願い申し上げます。

日本皮膚悪性腫瘍学会
理事長 土田哲也



進行期悪性黒色腫に対する薬物療法の現況

【山崎 直也(国立がん研究センター皮膚腫瘍科)】

近年の進行期悪性黒色腫に対する薬物療法は主に免疫チェックポイント阻害剤と分子標的薬の2つの柱を中心にめざましく進歩しています。米国では2011年、免疫チェックポイント阻害剤として抗CTLA-4抗体イピリムマブが、また分子標的薬としてはBRAF V600遺伝子変異を有する悪性黒色腫を対象としたBRAF阻害剤ベムラフェニブが承認されたことで薬物療法のbreak throughを迎えました。その後2013年にはBRAF阻害剤ダブラフェニブとMEK阻害剤トラメチニブ、2014年には免疫チェックポイント阻害剤の抗PD-1抗体ペンブロリズマブ、続いて同じく抗PD-1抗体ニボルマブが相次いで承認されました。米国で悪性黒色腫に対する治療薬として承認された新しい薬剤はこれら6剤です。

これに比べて欧州ではまだ抗PD-1抗体は承認に至っておらず、ペンブロリズマブ、ニボルマブの2つを除いた4薬剤が使われています。一方、日本でのbreak throughは

2014年でした。ニボルマブが2014年7月、世界で初めて日本で承認されたことは大きな話題となりました。日本の皮膚科グループで行った治療開発が、がん治療の面で世界の先頭に立った記念すべき瞬間でした。次いで同年12月にはベムラフェニブが承認されました。日本でも新薬の承認はさらに続きます。今年は今もなくイピリムマブが承認される予定です。そのほかにも、4月27日にはダブラフェニブとトラメチニブの承認申請が行われており、さらにペンブロリズマブの国内第II相試験も終了していることから現在は承認申請に向けて準備中です。おそらく、遅くとも今後2年以内に、現在米国で悪性黒色腫に対する新治療薬として使われている免疫チェックポイント阻害剤と分子標的薬あわせて6薬剤のすべてが日本でも出そろい、わが国において長らく存在した、治療薬の欧米とのドラッグラグはほぼ解消されると思います。

また、ペグインターフェロンα-2bは

米国に続いて、本年5月、日本でも承認されたステージIIIの術後補助療法薬として効能追加されました。これからも、次々に新たな標的分子や免疫チェックポイントをターゲットとしたものをはじめ様々な薬剤の開発が続いていくことが考えられます。われわれは短期間で世界に示した新薬開発に関する日本のチームワークの良さを今後も生かし、再びドラッグラグが生まれないう、常に欧米諸国との情報交換を行うとともに、国際共同治験への参加や新薬の米国・欧州と日本との同時承認が当たり前となる時代の早期実現をめざしてオールジャパン体制の充実を目標に学会員一丸となって協力していきましょう。

日本皮膚悪性腫瘍学会
副理事長 山崎直也



◆学術大会のご案内



第31回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会

会期:平成27年7月3日(金),4日(土)

会場:大阪国際会議場

会長:岡本 祐之

(関西医科大学皮膚科学講座)



会則委員会委員長
尹 浩信

信州大学奥山隆平教授、京都府立医科大学加藤則人教授、名古屋市立医科大学森田明理教授と会則委員会を担うしております。日本皮膚悪性腫瘍学会の法人化に伴い、定款が定められ、定款に従って会則を変更する必要があります。代表理事の埼玉医大土田哲也教授と事務局がある埼玉医科大学皮膚科学教室(特任)事務局を担っている緒方 大先生が法人化に伴う膨大な事務手続きに対応なさっており、会則委員会はそのお手伝いをしてまいります。役員(理事、評議員、委員)の任期、定数、選出に関する広汎な会則の策定、改訂などを担当しています。現在会則の改訂を進めている段階ですが、定款に従って正しく会則を変更することが求められており苦慮しております。法人化に伴い、会則の厳格な遵守が会員にも求められます。学会員皆様のご理解、ご支援の程どうぞ宜しくお願い致します。

会則委員会より

尹 浩信
(熊本大学大学院皮膚病態治療再建学分野)

第32回学術大会の御案内【金蔵 拓郎(鹿児島大学皮膚科)】

第32回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会を鹿児島で開催する機会をいただき大変光栄に存じます。会期は2016年5月27日(金)28日(土)の二日間で、「かごしま県民交流センター」で開催致します。近年の皮膚悪性腫瘍の診断と治療の進歩には目覚ましいものがあります。最先端の情報を集約し会員に提供すべくプログラムを企画しています。

特別講演には University Hospital Zürichの Reinhard Dummer教授を御招きします。Dummer教授は悪性黒色腫、悪性リンパ腫に関する優れた御業績を挙げておられ現在の研究皮膚科学の領域を代表する研究者の一人です。シンポジウムは診断に関して「皮膚悪性腫瘍の画像診断」、皮膚外科に関して「皮膚悪性腫瘍とリンパ節」、治療に関して「皮膚悪性腫瘍の新たな薬物療法」、また皮膚リンパ腫に関して「ATL」のシンポジウムを企画

しました。「ATL」は鹿児島という土地柄からはずせません。このシンポジウムでは思い切って演者に皮膚科医を含めず、HTLV-1キャリアーと患者の実態、発症機序、治療層別化のためのマーカー開発、新規治療、移植医療について各領域の第一人者の先生方に御講演いただきます。

悪性腫瘍の治療で欠かすことのできない緩和ケアに関する講演会を計画しました。演者は愛華みれさんと長倉伯博さんの御二方です。愛華みれさんは鹿児島出身の元宝塚歌劇団花組のトップスターです。数年前に悪性リンパ腫の診断を受けましたが病気を克服して現在も俳優として御活躍中です。長倉伯博さんは鹿児島市内の本願寺派のお寺の住職さんの立場で広く緩和医療活動を行なっておられる方です。お二方のお話をどうぞ御期待下さい。

学術大会では一般演題が特別講演やシンポジウムにおとらず大切です。むしろ一般演題こそが学術大会の核心をなすものだと思います。多くの先生方に御出題いただきたいと願っております。学術大会が開催される五月下旬は南国鹿児島でもまだ凌ぎやすい季節です。全国の皆様のお越しをお待ち致します。

第32回日本皮膚悪性腫瘍学会学術大会
会長 金蔵 拓郎



予後統計調査委員会より【岩月 啓氏(岡山大学皮膚科)】

日本のがん登録は遅れをとってきました。最近、平成28年1月の「がん登録等の推進に関する法律」の施行に向けて、「がん登録」整備が加速されています。しかし、日本皮膚悪性腫瘍学会および日本皮膚科学会が、「がん登録」法制化にどのように取り組むべきか具体的な協議はありません。自治体による地域がん登録、がん拠点病院を中心とした「がん登録」に加えて、関連学会におけるがん登録をどのように組み入れていくのか、十分な連携がとれているとは言えない印象があります。法制化に当たって、地域がん登録や院内がん登録では到達できない精度を保持しています。

この調査は、日本皮膚科学会の倫理委員会承認を得て実施していますが、今年、両調査とも更新申請を行い、継続が正式に承認されました。これにより、1)日本皮膚科学会の専門医研修関連施設への調査依頼が可能になり、2)学会承認を得た調査なので、これに回答した人には専門医更新のポイント(2単位で申請中)を取得できる制度を提案中です(現在、日

本専門医機構に申請中)。ほんの少しですがインセンティブがつくことになると思います。前述のNCDは、外科専門医制度と完全にリンクしています。皮膚科において、コホート調査を実施するのであれば、皮膚悪性腫瘍指導専門医の受験・更新資格とリンクさせる必要があると考えています。

日本皮膚科学会を通して「小児がん登録」への協力要請が本学会へ届きました。具体的には本学会で実施中の皮膚リンパ腫、メラノーマのデータから30歳未満を対象とした小児の皮膚がんデータを抽出し、提供するという事になります。他の癌種について、学会として、どのように「がん登録」を進めるか、学会員の皆様と考えていきたいと存じます。

予後統計調査委員長
岩月 啓氏



事務局より

学会費口座振替制度の導入について
これまで、学会日納入方法は金融機関からの振込のみでしたが、2015年6月27日より口座振替制度を導入いたします。現在学会員の皆様の半数程度が手続きを完了しております。まだ手続きがお済みでない会員の先生がいらっしゃいましたら、学会より所定の用紙をダウンロードしていただき手続きをよろしくお願い致します。振替での会費納入が難しい場合は、引き続き振込込みによる納入方法も受け付けております。

学会ホームページリニューアルについて
現在学会ホームページリニューアル作業を進めています。公開日は、次期学術大会期間中に開催されます。理事会・評議委員会での承認後7月6日を予定しております。

今後は新規承認薬剤の情報更新や、市民の皆様へ向け情報の発信などをより積極的に行っていく予定です。住所変更手続き、入退会手続き、Skin Cancer誌へのリンクもより操作性の高いものに更新されますのでご活用ください。

Skin Cancer誌完全オンライン化について

日本皮膚悪性腫瘍学会機関紙の「Skin Cancer」誌は、24巻1号(2008年)からJSTAGEにおいて運用を開始し、それ以降理事・評議員会にて紙媒体を廃止した完全オンライン化への移行について検討を重ねてまいりました。

この度、2014年度の評議員アンケートや理事会を経て完全オンライン化への移行が認められました。今後は第30巻1号より紙媒体での発行を廃止し、オンラインジャーナルに完全に移行いたします。つきましては2015年度発行の第30巻1号からは独立行政法人科学技術振興機構が運営するJSTAGEにおいて閲覧ならびに検索をして頂きますようよろしくお願い申し上げます。JSTAGEからの検索は本学会にもリンクがございまして、ご利用下さい。ログインの際には毎年更新されますパスワードのご確認をよろしくお願い致します。

(文責) 日本皮膚悪性腫瘍学会事務局 緒方 大